

日本人学生の英語発音上の問題点への一考察(2)

— 中学校生の場合より —

南 太一郎

Persistent Mistakes of English Pronunciation Made by the Japanese Student (2) : from the Case of Junior High School Students

Taichiro Minami

1. はじめに

1. 1. 前回の第一部においては、大学の英語専攻の者を中心に英語発音上の諸問題を論じた¹⁾。そこにおいて確認された問題点は、これまでも何度も多くの研究者によって指摘されてきたものと同様であって、日本人英語学習者の発音上の問題というものが、旧態依然として、しかも厳と存在し続けていることを改めて痛感させる結果ともなった。大学における発音訓練・矯正というものが持つ難しさの一つは、年齢的には成人に達している者が、以前誤って、あるいは不正確に習得してしまった外国語の発音を、その成人年齢にかなった知的学習とは釣り合わない様な一種の筋肉・反射運動として、母国語とは異なる音声・音素体系を学び直し、自己の内に習慣化、内在化[意識化]させなければならない、ということにある。それでも真摯な学習意欲を持つ者であれば、相当の努力と忍耐力とによって再教育を成し遂げることも出来るであろうが、それは並大抵の力で成され得るものではなく、又、他に数多く、深く学ぶべき事柄のある大学において、発音訓練にそれだけの力を割くということはきわめて非効率的でエネルギーのロスを伴うことでもある。だからと言って、大学での再教育は不可能だとか無意味だとか主張するものではもちろんない。それは一面きわめて大切なことである。にもかかわらず、それを非効率的エネルギーのロスだとあえて言うのは白紙の状態でも或るものを学ぶことと、いったん習得し習慣化されてしまった誤りを矯正し、改めて習慣化し直すこととは、効率の点でも効果の点でもきわめて大きな差があるからである。

その意味でも、学習者が正規には初めて英語と接することになる中学校の英語教員の責任は重大であって、前回の結びでも述べておいた様に、「発音に意を用いず、マズイ発音を教室でタレ流す教師ほど自分の責任を将来に転嫁するものはなく、反面教師的役割すら演じられない²⁾」ということを銘記しなければならないであろう。

1. 2. 中学校における発音の取り扱いが以上の様に重要であるとすれば、中学生が習得する[した]英語に関して、発音上どういう問題があるかということを確認しておくことと、それが大学生において見られた問題とどういう関係にあるのか、ということと比較考察することとはきわめて重要なことである。なぜなら、もしも両者間にかなりの相関関係が見られるとすれば、そこで浮かび上がってくる問題点³⁾こそが、広く日本人英語学習者に共通の克服されるべき発音上の諸点ということになるからである。

以上のことをふまえた上で、実際に中学生が発音した資料を分析し、問題点を拾い上げて考察を加えていくことにする。

1. 3. 調査資料には、中学校英語暗唱大会で発音されたものを用いた。⁴⁾資料収集の方法には、あらかじめ用意した発音上のポイントを含む単語や文章などを発音させ、それを分析するという実験的なものもあるが、この方法ではインフォーマントからいかに自然な加度の意識化を伴わない (careless) 資料を引き出すかが問題になってくる。暗唱大会は話者にはかなり緊張の伴う場であり、その点で問題もなくはないが、逆に、県下の中学校を代表する比較的英語の上手だと思われる者が選ばれて、相当の練習量をつんで出場してくることを考えれば、テープ教材を使っただけの練習や教師の指導を経た後に発表されたものにおいても見出しされる発音上の誤りがあるとすれば、それはかなり習慣化されてしまっているものだと見ることも可能だ、という利点がある。

1. 4. 以下全部で29名の出場者の発音を録音したものを基に分析を行った結果を、前回同様、母音、子音の別に記述し、今回はそれにアクセントに関する顕著な誤りをも加えて考察しつつ、問題点を論じていくことにする。⁵⁾

2. 母音 (Vowels)

現在の日本の状況を考えると、学校でテキストやテープ教材のモデルとされているのは主としてアメリカ英語であり、その立場からは独自の音素論の枠組みもあるが、今問題にしているのは具体音声であるので、日本でより一般的でなじみのある IPA (国際音声字母) を用いた表記法に従って記述する(1979年改訂版による)。⁶⁾

2. 1. [æ]

この音は英・米で多少音質に差が見られる。英音としては、米音より舌の緊張の位置が高く、舌の緊張も唇の張りも少ない場合が多いが、米音ではかなり舌の緊張も唇の張りも大きく、聴いた印象はかなり flat な音である。しかし、いずれの場合でも日本語の [ア] とは明確に音質の差があるので、日本人には習得されにくい音になっている。⁷⁾ 今回の結果でも、母音中で最も誤りの頻度の高いものであり、以下二つの誤りに大別されるが、1) が圧倒的に多い。

1) [ア] と発音される。

日本語にこれに対応する母音がないため、最も音質に近い [ア] に還元されてしまう。

(例—man, Japan, back, have, magazine, ran,...)

2) [e] (又は [エ]) と発音される。

特に米音の flat な音色を出そうとして舌、唇に緊張を加えすぎて、舌の位置が高くなりすぎ [e] の様に発音されてしまう。(例—black [blé:k], ad [é:d], wrap [rép])

2. 2. [u]

長母音 [u:] の短くなった音と誤解されることが多いが、音質は全く違う。日本語で音質に近い [ウ] (又は [オ]、ただし今回はこの例はない) に還元されてしまう。(例—woman, would,

wool, good, Schulz, looked,...)

2. 3. [ɜ:] ([ɜ:r], [á:r])

英語に特有の音で、調音が難かしいものであり、その為に次の二つに大別出来る誤まりが多く見られる。

1) [アー] と発音される。

これが最も多い誤りで、日本語では最も音質に近いと思われて無理にこの音に還元されてしまう。(例—turned, first, girl, her, pearl,...)

2) [オー] と発音される。

厳密には日本語の [オー] よりは [ɔ:r] に近い音と言った方が良いかもしれないが、どちらにしても r-coloring を意識して舌に加度の緊張が加わり、ために舌面が引き上げられて後母音の音色が強くなりすぎたものであろう。(例—world, words)

2. 4. [ɔ:(r)]

この音の誤りは主として以下の二つに大別される。

1) [オウ] の様に発音される。

[オ] はむしろ英語の [ɔ] に近く、[オ] よりは舌の高さは低い。そして [オ] は一応 [ウ] より強く、英語の二重母音的に発音されてはいるが、英語の [ɔ:] の調音位置が比較的定常的 (steady) なのと比べると、途中から [ウ] へ移行してしまう点に問題がある。(例—called, course, bought, saw, horse, thought,...)

2) [アウ] に近く発音される。

1) の場合もその可能性があるが、この場合も、綴りからの類推で誤って発音されたものであろう。(例—because, drawing) 又、一例だが、because が [bɪkə:z] と発音されたものがあり、[アウ] がアクセントの位置を誤って発音されて弱くなり、母音が合同 (coalesce) してしまったことを思わせる。

2. 5. [ou]

この音の誤りにも大別して以下の二つがあるが、1) が圧倒的に多い。

1) [オー] 又は [オ] と発音される。

二重母音であるという意識が習慣化されていない場合である。米音では [cu] が [o:] に近く発音されることがあるが、それでも末尾部には [u] への渉りがあって、単なる長母音的 [o:] とは違う。いわんや、[オー] ではない。教育的には、やはり二重母音として指導するのが望ましい。(例—notebook, don't, showed, home, folk, brooch, posters [オ])

2) [ɔu] や [au] の様に発音される。

これは [ou] の第一要素を調音する際に、円唇化が不十分である為、唇が開きすぎて後母音系列の [ɔ~a] あたりの音として発音されてしまうものである。

(例—going, toe, don't)

2. 6. [eɪ]

2. 5. 1) と同様に、これも二重母音であることが意識不十分で起こった誤りであり、[e:] の様に長母音的に発音される場合が主であるが、[e] と短くなったり、[eɪ] 全体の長さ (duration) が短い場合もある。(例—days, late, paper, paid, became, waited [いずれも [e:]] ; strange [e] ; way [[eɪ]全体が短い])

2. 7. その他の母音

以下誤りの数そのものは少ないが、問題だと思われるものを幾つかあげておく。

1) [ʌ]

この音の誤りにも主として次の二通りがある。

a) [ア] と発音される。

[ʌ] の発音自体についても、英・米、あるいは学者の間で記述に異同があるが、一応中舌母音の半広 (half-open) あたりから、後母音寄りのあたりの音と考えてよいであろう。これが日本語の [ア] と広母音で発音されてしまう。(例—loved, gun, enough)

b) 弱母音 [ə] に近く発音される。

開口度が小さくなりすぎ、あたかも弱母音のように弱く発音されてしまう。

(例—gun, enough)

2) [ə]

いわゆる弱母音 (weak vowel ; schwa) で、アクセントのない音節に表われる代表的な音であるが、これが [ア] の様に発音されてしまう。

(例—sugar, cartoonist, mailman, alone, accepted, Christmas, ...)

3) [ɪ]

日本語の [イ] の様に、英語の場合より舌面が高く前寄りになり、緊張を伴って発音される。

(例—children, sixty, chicken, big, dipper, drink, king, ...)

4) [ɑ:(r)]

長母音と聴こえるだけの長さがなく、[ɑ] であったり、調音の誤りで [ɜ:(ɜ:r)] の様に発音されたりする。(例—hard, Charlie, cartoons ; hard [ɜ:])

5) [i:]

これも長さが短くて [i] となったり、緊張が不十分で [ɪ] に近く発音されたりする。

(例—police [pólis], deep, please ; sleep, need [ɪ])

6) [ɪə(r)]

この二重母音の第一要素が [ɪ] ではなく [i] と発音されるもので、その点上記3) と同範疇に入れてもよいかもしれない。(例—ears, years)

7) [u:]

唇と舌に十分な緊張が加わらず、不十分な調音で [ɜ:~ɜ:] の間の音として発音される。

(例—Snoopy, soon)

3. 子音 (Consonants)

子音の記述に関しても、母音の場合と同様にIPAの表記法に従うことにする。

3. 1. [θ, ð]

日本語のサ行音 [ス, ズ, ザ] の様な、英語音としては不正確な調音の誤りがかなり多い。この音は決して日本人にとって習得不可能な音ではないが、習慣化することが困難な子音の一つである。調音点と調音法(point & manner of articulation)を初めにしっかり習得させると共に、前後の音とのつながりで連音レベルでも正確に発音出来るよう訓練することが大切である。

(例—thought, cloth, think, with; the, weather, that, with, , without, than, ...)

3. 2. [l]

語頭、音節頭に生じる、いわゆる「明るいl」(clear [l])で、舌尖[舌端]が歯茎にしっかり付けられた後、力強く弾かれて母音に移行するという調音が不正確で、日本語のラ行音の様に発音されてしまう。(例—like, long, letter, look, loved, alone, ...)

3. 3. 子音+ [r]

いわゆる子音群 (consonant clusters) の中にある [r] の調音が、やはり日本語ラ行音として誤って発音されてしまう。特にこの場合の [r] は、単独で語頭、音節頭に生じる時よりも反り舌 (retroflex) の度合いが大きく、したがって調音位置も後退する点に注意が必要である。

3. 4. [w]

この音そのものの円唇性を習慣化させることと共に、特に後ろに高母音 [i, u] が続く場合に正確に発音できるようにすることが大切である。そうでないと、今回のように [ウ(-)] となってしまう。(例—wim; womon, would, ...)

3. 5. [r]

上記3. 3. とも関連するが、無摩擦音 (frictionless fricative) ないしは漸近音 (approximant) としての [r] (正確には [ɹ]) が、弾き音 (flipped) である日本語のラ行音に代置されて発音されてしまう。¹⁰⁾ (例—very, Robinson, run, riding, reached, sheriff; around, ...)

3. 6. [s]

日本語サ行音は、音韻・音素的には /sa, si, su, se, so/ であるが、音声的には [sa, fi, sui, se, so] として実現されるので、特に [s] の次に前・高母音 [i] が続く場合の発音が、日本語の誤った類推からか [si-] とはならず [fi-] と発音されてしまう。

(例—sitting, sixty, sister, sin...)

3. 7. [ʃ]

3. 6. とは正反対の現象で、一見すると矛盾した現象ではあるが [ʃ] が [s] と発音されてしまう。(例—she, sheep, ship, ...)

3. 8. [f]

唇歯無声摩擦音 (labio-dental voiceless fricative) である [f] が、日本語へ行音の /hu/ の [F] (両唇無声摩擦音)、あるいは不正確で摩擦の持続時間のきわめて短い音として発音されてしまう。(例—food, fun, found, few, fgift, ...)

3. 9. 子音+ [l]

この子音群中に生じる [l] の発音の誤りには大別して次の二つがあるが、1) が頻度は高い。

1) 前に来る子音が無声閉鎖[破裂]音(voiceless stop [plosive]) の場合。

その子音と [l] との間に母音 [ɪ] が挿入され、本来 [l] は無声化された [l̥] となるはずなのに有聲のまま発音されてしまう。(例—please, closed, ...)

2) 前に来る子音が [s] の場合。

平唇 (spread) で無声音の [s] が [l] の前に来ると、調音点の移行がなめらかに行なわれず、[s] の摩擦が少なかったり、[l] が不正確に調音されてしまう。(例—sleep, ...)

3. 10. その他の子音

以下頻度数は低いが音声的に問題となる誤りを幾つかあげておく。

1) [v]

3. 8. で述べた [f] に対応する有声音であるが、これが両唇閉鎖音の [b] で発音されてしまう。(例—save, loved, very, ...)

2) [ŋ]

特にこの音が語末に来る場合、誤って [-ŋg] と発音されてしまう。(例—falling, going, crying, ...) これは綴りからの誤った類推による可能性もある。

3) [dz]

特に語末の複数を示す接尾辞が [d] で終わる語の後に付く時、破擦音的連続が正確に発音されず [z] の様に発音されてしまう。(例—words, friends, ...)

4) [z, ʒ, dʒ]

a) [z] が [dʒ] に発音される。(例—(New) Zealand, cars, president)

b) [dʒ] が [z, ʒ] に発音される。(例—Fuji, strange, changed, jump, larger)

5) [ɸ]

いわゆる「暗い l」(dark [ɸ]) が「明るい l」ないしは日本語のラ行音で発音されてしまう。(例—children, Hillman, little)

6) 不必要な母音が挿入される。

a) [-z] が [-zu] と発音される。(例—please, lose, was, as)

b) [t] が [tu, to, tsu] の様に発音される。(例—It, little, between)

c) [-kt] が [-kwt(w)] と発音される。(例—talked)

d) [ks] が [kis] と発音される。(例—expert)

7) [-tli/-tli] が [-tri/-tri] の様に発音されてしまう。(例—gently)

8) [ti] が [チ] と発音される。(例—practical)

9) [tʃ] が [チ] と発音される。(例—chicken, children, child)

10) [-ŋg-] が [-ŋ-] と発音される。(例—language)

4. アクセント (Accent ; Accentuation)

「アクセント」という用語を、ここでは一般に言われる強勢 [ストレス](stress) をも含むものとして考える。それは、強勢というものが、厳密には呼気力 (force of breath) の関与する生理的な強さ (物理的には intensity) を指すものであって、英語の二音節以上の単語やそれらの連なった句や節における卓立 [際立て] (prominence) というものは、普通呼気力以外の要素が一緒になって作用してはじめて成立するもので、中でも声帯の基本周波数¹¹⁾に基礎を置く声の高さ [ピッチ] (pitch) の関与が決定的に重要である、という理由による。

今回の結果では、アクセントに関する誤りは以下の四つに大別することができる。

4. 1. アクセントの位置

英語においては、単語が二音節以上から成っている場合は、いずれかの音節が最も大きな卓立を持つ。その位置は発話のリズムや意味の強調といった要因で移動することもあるが、原則としては各語において固定している。したがって、その位置を誤って発音すると伝達の障げになる場合も起こり得る。まずもって、辞書にかかげられているような形 (citation form) の各語の固定アクセントをしっかりと指導する必要がある。(以下に示す例では、誤った位置に置かれたアクセントを、その音節の母音字の上に、' の印で表示することにする。)

例—invite, cártoonist, injúred, execúted, póliceman

4. 2. 形容詞+名詞

この場合の標準アクセント型は (ˌ ə) あるいは (ˌ ɪ) として表わすことが出来る。つまり、特に何らかの強調が置かれな限り名詞の方を際立たせる発音になる。しかるに、今回の結果では、文脈上対比強調が必要でない所で形容詞が不必要に際立って発音されている例が目立つ。

例—a síck man, in néw paper, the óld man, at the ópen door, the yóung man, the líttle girl

4. 3. 動詞+副詞

この場合のアクセントの型は (ˌ ɪ) が普通であるのに、動詞の方が不必要に際立って発音されてしまう。

例—gíve up, gót up, rún over, lóok up, wént out

4. 4. 弱形 (weak form)

本来品詞的にもリズム的にも、特別な強調が置かれる場合を除いては、弱形で発音されるべき語が不必要に際立って発音された多くの例があった。

例—sóme strange birds

I can't go tó sleep.

...he was invited tó dinner.

Writing letters on rocks has got tó stop.

Whén he was a little boy, ...
 Whén she began to walk again, ...
 But he understood thát he was safe.
 The girl took out all the coins thát she had in her pocket.
 ...to sóme newspapers.
 I cán go tó sleep.
 We cán still see these stars.
 ...had béen invited.

特にこの弱形に関しては英語のリズムとの関わりが大きく、英語らしい発音を形作っている重要な要素であるので、徹底した指導が必要である。ただ、この弱強音節交代を基本とする英語のリズムが強調されすぎると、かえって詩の韻律的朗読 (scansion) のような型にはまった (stylized) 英語になってしまうので注意を要する点でもある。

5. 議 論

以上、中学生の英語発音上の主たる誤りを縷々指摘してきたが、以下ではこの結果を前回の大学生のもの¹²⁾とつき合わせて、母音、子音の順で各々論じていくことにする。資料数が限られているので、断定的なことは言いにくい¹²⁾が、それでも日本人英語学習者に或る程度共通した発音上の誤りの主たる傾向は示すことが出来るだろうと思う。

5. 1. 母音

大学生と中学生の発音で共通に生じている誤りを列挙すると次の様になる。

[æ, ɜ:, ʌ, ə, ɑ:(r) ; ɔ:(r), ou ; u, ɪə(r), i:, u:]

この内最も大きな問題と思われるのは、日本語の [ア] 音系列に還元される音である。それらは [æ, ɜ:, ʌ, ə, ɑ:(r)] であるが、その内でも [æ] が群を抜いて頻度が高い。

その次に問題なのは [ɔ:(r)]-[ou] の二音で、長母音と二重母音の対立が正確に弁別されていないことを示す誤りである。

残りの [u, ɪ, ɪə(r), i:, u:] は、いずれも日本語の内に近い音質の母音がある為、各々 [イ] あるいは [ウ] のどちらかに還元されてしまう誤りである。

以上から言えることは二つあり、第一は、もちろん英語の音声として各々の母音の音質をきちんと初期の段階で習得させておかなければ、後々まで不正確な音として発音され続けるということであり、第二は、日本語の音韻・音声体系と英語のそれとを正しく対照させて意識化させておかなければならないということである。言い換えれば、それだけ母国語の音体系は個人に根差したものであるから、単に話者の意識の中に外国語の音体系を割り込ませるのではなく、母国語と外国語の両方の音体系が賢明に併存或いは共存し得るよう指導していく手立てが講じられなければならない、ということになる。そして、その為には、母国語の音声そのものをいったん主観的・無意識的レベルで把握されている状態から客観的・意識的レベルへと移して把握させ、それと外国語音とをいわば同じ平面上で比較対照させ、その後再び主観的・無意識的レベルへと導き直す、という方法が原理的には必要なのではなかろうか。主観的物事を客観化して把握する能力こそが人間の理性の

働きなのであり、教師はゆめゆめそのことを忘れてはならないであろう。

5. 2. 子音

子音に関しては、今回の結果についてのみ言えば、母音の場合ほど大学生と中学生の発音の誤りに共通な音声項目はない。その理由の一つは、大学生の場合には問題音を授業の中で或る程度客観的に取り扱った成果が出たからだ、とも考えられる。しかし、だからといってその発音が習慣化されたのかどうかは疑わしい点もあり、その意味では、中学生の間に見られる誤りが、より根本的な問題を示しているようにも思われる。

子音の発音に関しては、母音の場合よりは触覚 (tactile sensations) に訴え易いので、調音点と調音法を最初にしっかり指導しておくことが大切である。又、子音そのものの発音に加えて、音節構造 (syllable structure) という観点からも考慮が払われなければならない。日本語の音節構造は、周知のようにCV(子音+母音)をその基本とするが、英語はそうではないので、特に子音群の取り扱いに関して、子音間に余計な母音が挿入される傾向に注意が必要であろう。

大学生と中学生の両者に共通の誤りとしては、[f], [ŋ-rŋg], それに子音+l/rの発音があげられる。[f]に関しては、両者共英語音としては摩擦力が弱すぎたり、その為に持続時間が短かすぎたりする。又、中学生の例では、調音点が不正確で本来上歯と下唇の間で摩擦が起こる唇歯無声摩擦音が、両唇無声摩擦音である日本語の[F]になってしまっている。調音点を正確にすることと共に、英語は子音性の豊かな言語 (consonant rich language) であって、呼気力が日本語の場合よりもはるかに強いということを常に指摘し、訓練しておく必要があろう。

[ŋ-rŋg]の対立に関しては、特に語尾に来る[-ŋ]が[-ŋg]となることと、語中で[ŋg]であるべき時に[ŋ]になっていることが問題である。[ŋ]か[ŋg] (及び[g])かということには大まかな原則があるが、初期の練習としては個々の単語に関して、発音記号などを援用しつつ注意を喚起することが近道かもしれない。¹³⁾

子音+l/rに関しては、特に破裂[閉鎖]音+l/rが問題になる。つまり、語頭、音節頭の/p, t, k/の次に来る/l, r/は、氣息[帶氣](aspiration [h])の代用として無声化されるが、それが不十分であったり、破裂音と/l, r/との間に余計な母音が挿入されたりするのである。呼気力としての強勢は、英語においては音節間現象であって、エネルギーは音節頭が最大であるから、音節頭の子音を勢いよく発音すること(特に/p, t, k/ではその次に強い氣息が伴うこと)を銘記させる必要がある。

子音の次、あるいは子音群の間に母音が挿入される例は他にも見られる。例えば、[r-, br-]が[fur(w)-, bur(w)-]となったり、[-z]が[-zw], [t]が[tw, to, tsw], [ks]が[kis]となったりするものである。これらは、上述した日・英の音節構造の違いということがあいまいにされている為に生じてくる誤りでありその点に特に注意が必要である。

次に、今回の結果にのみ表われている誤りが幾つかあるが、それらはみな誤って日本語の中の近い音に置き換えられている例である。列挙すると以下の通り。

[θ, ð; l, t; s; r; w; v; ʃ, ʒ; tʃ, dʒ]

これらの発音上の誤りに関しては、三章において述べたので再述しないが、共通して言えることは、やはり英語の子音の調音点と調音法が不正確にしか習得されていない、ということである。確かに、初期の段階で余り複雑な理論で説明しても中学生にはかえって負担になるとも言えるが、指導する教師としては、これらの音を矯正することが出来る程度の音声に関する知識と能力を持って

いなければならないであろう。

6. おわりに

以上、概括的ではあるが、日本人英語学習者における発音の問題点について論じてきた。総じて言えることは、繰り返しになるが、やはり初期の段階で英語音声の正確な発音指導というものがいかに重要であるか、ということである。思春期に達した中学生にとって、母国語とは違った英語音を正確に発音することには困難も恥じらいもあるであろうが、やはり教師としてはそれらに怯んではならないのであり、余り細かな日・英語の発音上の差異を強調しすぎることは問題だとしても、限られた時間を有効に利用しつつ、まずもって正確な英語音声を生徒の中に意識化、習慣化させることに意を用いるべきである。そして、それを成功させる為には、何よりも教師一人一人が自分の発音と耳を常に磨くよう心がけ、日・英語対照比較的観点から、英語音声に対する理解を深めていくことが大切である。テープ教材をただ与えて真似させるのではなく、テープ教材を正しく批判、評価することも含めて、ギムスンも言う様に、「彼[教師]は学生に可能な限り忠実な(faithful)英語発音のモデルを提供するという義務を負っている」¹⁴⁾のである。

学問として研究することは一応別にして、英語音声の習得はそれ自体英語学習における究極的目的ではない。それは出来るだけ早く卒業すべき事柄なのである。英語発音が不得手であるという劣等感が、昂じて怨念の如くなり、ために英語嫌いの生徒が今以上に増加する前に手を打っておくべきことなのである。英語を学ぶことの奥行きは深く、発音はそのほんの初期の一部を占めるにすぎないものである(もちろん、正確な発音が習得されたとして)。それを大学、又はそれ以降にまで持ち越すということは、いかにも膨大な国民的時間と労力の浪費なのであり、教育が百年の大計だとするならば、教師の責任はいやが上にも重大だと言わざるを得ないのである。(了)

物有本末。事有終始。知所先後。則近道矣。

(物に本来有り、事に終始有り。先後する所を知れば、則ち道に近し。)

——『大学』経、第三節

注

- 1) 拙論『日本人学生の英語発音上の問題点への一考察(1)』(『宮崎大学教育学部紀要、人文科学』第59号 1986年, pp. 45-52.)
- 2) 同上. p. 51.
- 3) ただし、部分の総和が必ずしも全体を意味しない場合がある様に、個々の発音それ自体は良くなったとしても、それが即英語全体の英語らしさ(Englishness)になるとは言えず、ある者の英語が英語らしく聴こえるという場合、その全体性ということには、個々の分節音以外の様々な音的要素が含まれていることを銘記しなければならないであろう。又、その意味で、完璧に英語らしさというものが発音の上で達成されたとしたら、それは学習者の個性そのものをも変えてしまうことにつながるので(D. アバクロンビー『英語教育の原理と問題』(宮田斉・田辺洋二共訳)、松柏社、1969. p. 9. 参照)、そこまでの英語らしさは必要ではなく、日本人は日本的発音で良いのだ、という俗見もあるが、役者がある役を演じるからといって、その役者の個性が変わってしまったということはないのであり、名優と言われる人ほど、多くの違った個性の役を演じ分け、しかも自分の個性というものはそれによっていささかも変わるものではないと同様に、(又そうでなければ、例えば沙翁の劇の役者は務まらない)、個人差はあっても、発音の面で英語らしさを追求することは(又その様に指導することは)、必要なことであると信ずる。

- 4) 第29回宮崎県中学校英語暗唱大会(1985年10月25日(金)に宮崎県立図書館ホールで行われ、現筆者もその審査員の一人を務めた)。
- 5) ただし、これも前回同様、限られた状況で限られた人数の者について考察した結果なので、定量的分析に基づく場合のように、一般化は出来ないであろう。
- 6) ただし、母音、子音等の記述、分類に関しても、純理論的考察が主目的ではないので、理論的厳密性は問題とはしない。
- 7) 以下、英語音との誤解を避けるために、原則として日本語音はカタカナ表記する。
- 8) 上記注の1)にあげた拙論, p. 47. の3.2. 参照。
- 9) 例えば, J. C. Catford. *Fundamental Problems in Phonetics* (Edinburgh Univ. Press, 1977), 8章, 特に p. 162の図参照。
- 10) 英語の音素/r/には、主として七種類の異音の実現形があるが、実際に最も頻度の高いのは本文で言及した有声無擦摩擦音の[r]である。又、日本語の弾き音に対して、特に英音では「はたき音」(flapped)と呼ばれる音がある。例えば、'a teacher of English' の場合の様に有声音間(intervocalic)に生じる時、舌尖が歯茎に一回だけ瞬間的に接する(tap)音である。それに対して、日本語ラ行音の弾き音は、舌尖の裏面が歯茎に接触する調音法を取る点で異なっている。詳しくは、中野一雄『英語子音論』(学書房出版, 1973), pp. 44-48 参照。
- 11) 詳しくは、拙論『英語のいわゆるアクセントについて』(『鹿兒島純心女子短期大学研究紀要』, 1981年, 第11号, pp. 39-46) 参照。
- 12) アクセントに関しては、前回の拙論では言及していないので、今回の比較考察からは一応はあしからずしておく。
- 13) [ŋ]か[ŋg]および[g]か、ということの原則に関しては、例えば、P. Roach, *English Phonetics & Phonology* (Cambridge Univ. Press, 1983), 7章1節, pp. 45-47参照。又、より詳しい音声・音素論的議論に関しては、同じくRoachの上記テキスト用 *Tutor's Book*, pp. 28-31 参照。又、実際教える場合の為に、要領よくまとまっているものとしては、三宅川正・増山節夫『英語音声学—理論と実際—』(英宝社, 1986), p. 59の脚注参照。
- 14) A. C. Gimson, *An Introduction to the Pronunciation of English* (3rd. ed., Edward Arnold, 1980), p. 304 参照。この部分、原文を引用しておくと、“(the *foreign teacher* of English constitutes a special case.) He has the obligation to present his students with as faithful a model of English pronunciation as possible.”。

(1986年4月14日 受理)